土師器（はじき）

弥生時代が終わり、古墳時代に入ると、使われている焼き物にも変化が見られます。弥生時代の土器には、各地域での特徴がみられましたが、古墳時代になると全国的に似た土器がつくられるようになります。古墳時代に現れる共通性をもった土器は、「土師器（はじき）」と呼ばれています。▶

〔古墳時代前期の遺物（八畝畑遺跡出土）〕

須恵器（すえき）

須恵器、と呼ばれる焼き物は、５世紀頃に朝鮮半島から伝わりました。この焼き物は、斜面に穴を掘った窯（かま）で高い温度で焼き上げるため、素焼きの土器に比べて硬く、鉄分が変質して灰色に仕上がります。土器は粘土ひもを積み上げて形をつくりますが、須恵器はろくろを使い粘土を回転させて形をつくるので、薄くととのった形に仕上がります。▶

〔古代の遺物（八畝畑遺跡出土）〕

八畝畑遺跡とこの地域にかかわる年表

時代	日本列島の歴史	八畝畑遺跡とその周辺の歴史	付近の遺跡
旧石器時代			
縄文時代	12,000 年前		
弥生時代	2,400 年前 239 年　卑弥呼が中国に遣いを送る		岡島遺跡 高木遺跡 西山・五砂山古墳 太夫塚古墳
古墳時代		八畝畑遺跡第２面の時代。竪穴建物跡などが築かれる。古い河岸になどに大量の土器が埋まる。	広田川河床遺跡 羽角山古墳群
飛鳥時代	645 年　大化の改新 694 年　藤原宮に遷都	八畝畑遺跡第１面の時代。古い河川が完全に埋まり、竪穴建物跡・掘立柱建物跡などが築かれる。	
奈良時代	710 年　平城京に遷都		
平安時代	794 年　平安京に遷都		室遺跡
中世	1192 年　源頼朝が征夷大将軍になる 1575 年　長篠・設楽が原の戦い	曲げ物を使用した井戸が築かれる。	

発掘調査地元説明会資料
2013 年 10 月 5 日（土）

調査主体：（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
調査支援：　（株）シン技術コンサル

八畝畑（やせばた）遺跡

八畝畑遺跡は、愛知県岡崎市正名町吹野、八畝畑に位置し、弥生時代後期から古墳時代、古代、中世にかけての複合遺跡です。この遺跡がある場所に、県道・岡崎碧南線が通されることになり、工事の前に発掘をおこなって調査記録を保存することになりました。調査は五月から始め、十月末に終了する予定です。

調査地点周辺は、水田を造る時に土を削って高さを合わせたため、昔の人々が生活した痕跡が消えたり、深い部分だけが残る状態でした。それでもこの場所には、私たちの祖先が生活した場所を示す遺構、遺物が残されていることが、調査によってハッキリと確認できました。

弥生時代後期〜古墳時代前期

八畝畑遺跡の発掘調査では、遺構、遺物によって確認された時代が複数あります。この中でいちばん古い時期は、弥生時代後期から古墳時代の初め（４世紀頃）でした。この時期には、川が調査地点の中を流れていたようで、新幹線に近い側では砂が厚くつもっていて、遺構や遺物はみつかっていません。この川に向かって低くなり始める位置では、当時の土器が残りの良い状態で多く出土しました。壺（つぼ）、甕（かめ）、高杯（たかつき）などが、まとまって出土しています。岸から南側では、この時代の人々が住んでいた竪穴建物跡と思われる遺構も、見つかっています。

古代・中世

古墳時代前期より新しい遺構、遺物は、古代（７、８世紀頃）まで時期が下がります。この時期になると、新幹線側に流れていた川も場所が変わって埋まり、川であった場所も含めて、調査地点全体で遺構、遺物がみつかっています。竪穴建物（たてあなたてもの）、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）、井戸（いど）、土坑（どこう）などが見られ、集落（人々が集まって生活する場所）であったことがわかります。

井戸跡は複数見つかっていますが、井戸枠のあるものが多く見られました。井戸の中では、鎌倉、室町時代の焼き物が出土するものもありました。

竪穴建物
掘立柱建物
柵列
井戸

- 地図データ ©2013 Google, ZENRIN -　〔周辺遺跡分布図〕

調査区の中では、古墳時代前期の土器が集中して出土する地点がありました。地面を掘り込んだ痕跡などは確認することができなかったことから、河川際に廃棄された土器であると考えられます。ほとんどの土器が壊れた状態でみつかりましたが、なかには割れていない状態のものもありました。土器に混ざって植物の種もみつかっています。捨てられたものは他にもいろいろあったかもしれませんが、腐って無くなったのかもしれません。▶

〔遺物集中〕

八畝畑遺跡では竪穴建物や掘立柱建物などが調査されており、集落が営まれていたことが判明しました。集落は出土した遺物から、古墳時代前期と古代（７・８世紀）の２時期に展開していたと考えられます。左の写真は、一辺が７m程度ある、比較的大きな規模の竪穴建物跡です。北側にカマドが造られており、柱穴は見つかりませんでしたが、壁際に周溝が巡っていることが確認できました。また、現場からは昔の人が掘った小穴が多数発見されており、右の写真のように規則的に配列されている小穴は、地面に掘った穴に直接柱を立てる方法で建てられた、掘立柱建物の柱穴であると考えられます。▼

〔2400SI 完掘〕

〔291SB 全景〕

井戸跡は６基発見されました。多くは井戸枠として曲げ物が利用されており、写真は曲げ物を断ち割って埋設状況を確認した状態です。山茶碗や常滑産の甕の破片などが出土し、時期は中世であると考えられます。▶

〔040SE 断ち割り〕